様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００２７１

研究課題名（和文）帝国日本の情報統制データ網と闇ルートの機能に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Information Control Data Network of Imperial Japan and the Function of 'Shadow Routes'

研究代表者
高　榮蘭（KO, Young Ran）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：３０５７９１０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：1920年代半ばから1940年代はじめまで、帝国日本の検閲システムは、内地―朝鮮―台湾―満洲を繋ぐ形で膨大なデータ網を構築しながら拡張した。日本語が植民地において抑圧の道具であったという理解では、内地では流通が許可されていた日本語書物の搬入を、なぜ朝鮮総督府が必死になって阻止しようとしていたのかが読めない。また、検閲の暴力的な側面だけにとらわれると、情報統制のデータ網に痕跡を残さない形で、日本帝国の法域を潜り抜けるための「闇ルート」が機能していたことを見落とすことになる。本研究は、これらの側面を同時に捉えながら、帝国日本の読書空間のあり方を問うものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
加害/被害、記憶/忘却、戦前/戦後などの二項対立的な思考構図は、第2次世界大戦以後線引きされた国民国家の土台の上で構築されたものである。しかし、本研究は、日本や韓国など、現在の国民国家単位の思考ではとらえることの出来なかった、新たな研究の枠組みの提示につながり、英語圏における「東アジア」学をめぐる線引きに対しても、再考を求めるものになるだろう。このような研究を進めることによって、公式的なものとして承認されたもの、主に著名な知識人が書いた「資料―言葉」だけに自閉しやすい、研究の領土性自体をとらえなおす契機を見出すことが出来ると期待している。

研究成果の概要（英文）：From the mid-1920s to the early 1940s, Imperial Japan's censorship system expanded, building a vast data network connecting mainland Japan, Korea, Taiwan, and Manchuria. Based only on an understanding of Japanese language as a tool of oppression in the colonies, it is difficult to grasp why the Governor-General of Korea tried desperately to prevent the importation of Japanese-language books that were permitted to circulate in mainland Japan. Furthermore, if we are caught up only in the violent aspects of censorship, we might miss the fact that "Black Market Routes" functioned to evade the jurisdiction of Imperial Japan in forms that left no trace in the data network of information control. This research focuses simultaneously on these various aspects of censorship, questioning the actual conditions of the reading space of Imperial Japan.

研究分野：近現代日本語文学

キーワード：情報統制　検閲　出版市場　メディア　植民地朝鮮　思想統制

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

これまで、獲得した挑戦的萌芽研究（研究代表者、課題番号：24652051）、基盤研究（Ｃ）（研究代表者、研究課題番号：15K02268、18K00294）などを通して、1945 年以前の帝国日本の領土内において、日本語・朝鮮語の書物や書き手の移動は、民族別・言語別の境界を侵犯する形で行われたものであり、そこには常に権力との攻防が刻まれていたことがわかった。また、1945 年の帝国日本の解体以後、東アジアは米ソによって再編されるが、その過程で、旧植民地であった韓国と日本の間には「文学―文化」をめぐる様々な闇ルートが出来上がり、そこには韓国の軍事独裁政権への抵抗をめぐる、「人・書物・資本」の交錯が介在していたことを明らかにすることが出来た。その過程で、情報統制データに対する思考が、抵抗思想に対する抑圧の重さを示すレベルに留まり、朝鮮総督府と日本内務省の資料に対する定量分析や共起語（co-occurrence word）分析を媒介とする「文化ネットワーク地図」への可能性を模索してこなかったことに気づいた。

２．研究の目的

（１）　帝国日本をめぐる研究領域の枠組みを問い直す

1920 年半ば以後、日本の出版資本が想定していた読者には「植民地」読者がつねに入っているにもかかわらず、旧植民地を連想させる言葉が介在すると、「朝鮮」学、「台湾」学という枠組みに閉じ込め、その研究方法を選択しないものにとっては、それらが意識しなくてもよいものになっている。しかし、帝国日本の政治的な影響が及んでいた植民地の近現代について研究する人々にとって、日本語資料、日本語研究文献の検討は避けて通れない。これは、方法的な流行とは異なる、必須―義務である。それは、「日本学」という限定された領域ではなく、人文学を対象とするかぎりなかなか逃れられない前提である。しかし、日本語空間において、とりわけ日本語を第一言語とする研究者の場合、「朝鮮」あるいは「朝鮮語」の文献なしでも、帝国日本の研究が可能であるという考えが続いてきた。植民地時代からの知の位階が転覆されることはない。本研究での実践は、そのような傾向に対して再考を求めるものでもある。

（２）情報統制データ網の分析方法を見出し、東アジアの思想空間の地図を読み替える

これまでは、内地と植民地の検閲制度の差異について注目した研究が主流であった。内地では納本制による事後検閲と発禁による経済制裁が行われていたのに対し、植民地では事前検閲が行われ、新聞雑誌などの紙面では一見すると検閲が実施されていないかのように統制が働いたことに注目し、植民地の検閲がいかに厳しかったのかに関する議論が展開されてきた。しかし、このような違いに注意を払いながら、社会主義思想に対する統制が最も厳しかったと言われている、1932 年の『朝鮮出版警察月報』の定量分析の結果を照らし合わせると、社会主義書籍ではなく、むしろ在朝日本人が刊行した媒体への統制が急激に厳しくなっていることがわかる。この結果を定量分析の方法だけで接近しても、プログラミングの領域のレベルに留まり、解釈につながらない。ここに、法的な制度や歴史的な先入観から抜け出し、データを細分化し、接合させる必要が出てくる。本研究では、これまでの検閲研究を踏まえながら、新たな形で情報統制データ網の分析方法を見出していく。それを通して、支配と被支配、抑圧と抵抗という二項対立的な線引きではとらえきれない、重層的な日本語の読書空間を浮き彫りにし、新たな思想史―文化史―文学史の可能性を示したい。

３．研究の方法

（１）情報統制システムの転移とデータ網の相関関係に関する調査

本研究で取り上げる時期に、内務省警保局からは『出版警察概観』『出版警察資料』『出版警察報』などが、朝鮮総督府図書課からは『朝鮮出版警察月報』『新聞紙要覧』『出版警察概要』『朝鮮総督府禁止単行本目録』などが内部資料として刊行された。これらのデータに共通しているのは、以下の三つの項目である。

① 検閲対象の出版物の種類と性格に関する概要及び行政処分の統計

② 注意、削除、差押、発売頒布禁止など、行政処分を受けたテクストの目録

③ 行政処分を受けた文書の日本語の要約

韓国では大型研究資金を投入し、朝鮮関連の資料の定量的分析が可能な txt 形態での入力作業（pdf は使えない）が行われ、その成果が発表されつつある。その代表的な研究者である李載然の研究論文を翻訳した上で、講習会を開催し、研究方法を学んだ。その方法を導入しながら、日本帝国の植民地及び占領地域を網羅する形で再編されていく情報統制システムの仕組みと書物―思想の拡散（闇ルート）の相関関係を明らかにした。

（２）旧植民地で再現される旧日本帝国の情報統制システムと日本語の役割に関する調査

戦後の日本語メディアは、1960 年代から 80 年代に至るまで、韓国軍事独裁政権への抵抗の言説を提供したり、韓国語では禁じられた思想の亡命先としての役割を担っていた。それは 1930 年代において、抑圧言語でもあり、抵抗の思想（植民地朝鮮の社会主義者・独立運動家の多くは、日本語の書物を媒介に抵抗の思想を学んだ）を提供する言語でもあった日本語の両義的な役割と類似したものである。2 つの異なる時代の相互関係をとらえるために、日本・植民地朝鮮・台湾メディアの書物に関する広告資料、日本の内務省・朝鮮総督府の検閲資料、シカゴ大学の奥泉栄三郎関連資料、韓国国会図書館、ソウル大学・成均館大学・延世大学図書館の所蔵資料を調査した。それによって旧帝国日本の情報統制システムと闇ルートの攻防が再現されるプロセスと日本語の役割に関する研究成果を発表できた。

４．研究成果

（１）2021 年度

情報統制のデータ網について理解するためにはデジタル人文学に関する理解が必要である。2021 年度はこの分野で最も注目されている韓国の OH YoungJin（漢陽大学兼任教授）氏をお招きし、国際ワークショップ「なぜ！PC ゲームはこの時代の新しい文学なのか」（5 月 12 日）を開催した。また本研究の土台を作るためには、物質としての日本語書物をめぐる朝鮮・台湾・日系コミュニティの受容に関する理解が必要である。国際会議「『書物の近代』からそれぞれの「書物」の近代へ」を開催し、紅野謙介（日本大学）・Edward Mack（ワシントン大学）・五味渕典嗣（大妻女子大学）・黄鎬徳（韓国成均館大学）・中野綾子（明治学院大学）・呉佩珍（台湾国立政治大学）氏らに登壇していただき、近代以後の日本語書物の移動と交錯について議論した。シカゴ大学の Kyeong-Hee Choi 氏とは検閲をめぐるデジタル人文学の成果を踏まえながら、英語と韓国語の共著の執筆を続けている。韓国圓光大学の金在湧氏が中心になっている台湾・中国・日本・韓国の研究者との共同研究も続いており、「2021 東亜植民地主義と文学会議」（10 月 23 日開催）では日本帝国と植民地の知の循環について議論した。

（２）2022 年度

2022 年も引き続き情報統制のデータ網に関する理解を深めるためにデジタル人文学に関する専門家をお招きし、講演（講習会に近い）を開いた。2022 年度はこの分野で最も注目されている韓国の孫真元（高麗大学）氏をお招きし、講演会「デジタル時代の韓国文学-WEB 小説の現在」

（7 月 8 日）について講演をしていただいた。その他、日本の文学・文化史に関わる連続講演会を主催した。村上陽子「沖縄と日本の狭間で―沖縄近代文学史―」（11 月 2 日）、川口隆行「「人間」と「文学」の限界に向き合う―詩歌から読み解く原爆文学史―」（11 月 23 日）、岩川ありさ「生きること、物語ること、語れないこと―トラウマとフェミニズム批評―」（12 月 7 日）、友常勉「島崎藤村『破戒』と中上健次〈熊野サーガ〉―部落問題と文学―」（12 月 14 日）、康潤伊「「新しい」のその先へ―在日朝鮮人文学と日本語文学―」（12 月 21 日）、紅野謙介「文学史の語り手はだれか？」（2023 年 1 月 18 日）。また、韓国文化体育観光部、国立国語院、成均館大学共催の「冷戦書物の文化史」という国際会議（10 月 6 日～7 日）で発表した。ここではアメリカや日本、韓国の出版社代表、韓国翻訳院の関係者と、今後の共同研究の可能性についても話し合った。その他、米国、日本、韓国、中国、台湾の研究機関主催の国際会議で 9 回の発表を行った。韓国でデジタルヒューマニティーズ研究を牽引している李載然「生活と態度 機械が読む『開闢』と『朝鮮文壇』の作品批評用語と批評家」を慶応義塾大学の金景彩氏と共訳で発表した。シカゴ大学の Kyeong-Hee Choi 氏とは検閲をめぐるデジタル人文学の成果を踏まえながら、英語と韓国語の共著の執筆を続けている。韓国圓光大学の金在湧氏が中心になっている台湾・中国・日本・韓国の研究者との共同研究も続いており、「2022 東亜植民地主義と文学会議」（8 月 17 日）では帝国日本と植民地の知の循環について議論した。

（３）2023 年度

これまでの研究成果を発表するための単行本の執筆に力を入れた。2024 年 5 月に、『出版帝国の戦争――不逞なものたちの文化史』（法政大学出版局）から刊行される予定であり、本研究費の成果であることも明記した。この本では、すでにデジタル化がかなり進んでいる韓国の新聞、雑誌関連のデータベースを使用し、分析を行っている。この本の韓国語訳の出版社も決まっており、本科研費の当初の計画通り、多言語による成果の公開に向けて準備を進めている。 *Humanities* というオンライン雑誌の特集： Modern Japanese Literature and the Media Industry に参加し、 “Making Capital of ‘Illegal’ Publication under Japanese Imperial Censorship” （翻訳：Nick Ogonek, Kyeong-Hee Choi）, *Humanities* 2023, *12*(5), 89, 25 August 2023）という論文を発表し、本研究の成果の一部を公開した。出版の歴史と現状の把握も必要であるところから、出版やメディア業界で活躍している方達をお招きし、連続講演会を行なった。鈴木英生「よりマシな社会を再生産する仕事」（10 月 25 日）、奥田のぞみ「編集者ってどんな仕事？学術出版のばあい」（11 月 1 日）、白井魁「“評”の意義―台湾の文学と出版を交えて」（11 月 8 日）、木村理恵子「出版におけるライツマネジメント――版権を扱う仕事、コンテンツを活かす仕事」（11 月 15 日）、金承福「韓国文学を楽しもう！」（11 月 29 日）、藤崎寛之「ある編集者の体験的出版史 1996―2023」（12 月 13 日）、川満昭広「特集化される「沖縄問題」―沖縄戦の実相と今をめぐる出版の意義―」（12 月２０日）また、昨年度に引き続き、シカゴ大学の Kyeong-Hee Choi 氏と共著を執筆しながら議論を深めている。2023 年の夏休みは、シカゴ大学の招聘をうけ、一ヶ月間滞在しながら、同大学の図書館で故奥泉栄三郎の時代から集められた検閲関連の資料を調査するとともに、共同研究を行った。その成果は、2025 年 5 月 11 日、ソウルの成均館大学で開かれた国際会議で発表した。韓国圓光大学の金ジェヨン氏とは、日中戦争期と冷戦時代の東アジアにおけるアメリカと日本の役割に関する二つの共同研究も順調に進んでいる。2023 年度は対面での研究会が実現できなかったが、2024 年 4 月 20 日に韓国の済州大学で中国、台湾、日本、韓国の共同研究メンバーが集まり、対面の国際会議を行った。それぞれの地域における書物と文化が、日本帝国の情報統制とどのような形で駆け引きし

ながら拡散していったのかについて議論した。その他、ASCJ **と** AAS **にパネルで参加し、研究成果を発表した。**

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 高榮蘭	４．巻 7
２．論文標題 「翻訳の不／可能生とK文学ー日本語で「82年生まれ、キム・ジヨン」と「こびとが打ち上げた小さなボール」を重ね読みする」（韓国語）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『New Redical Review』	６．最初と最後の頁 272-300
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 関田朋子 ， 石岡丈昇 ， 大場博幸 ， 尾崎知伸 ， 北原鉄朗 ， 高 榮蘭 ， 小林和歌子 ， 十代 健 ，周 彪，シュミット マリア ガブリエラ， シュヴァルツ トーマス	４．巻 105
２．論文標題 「文理学部の教育における国際化：ICT(情報通信技術)を利用した教授法開発構築のための基礎的・実践的研究」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』	６．最初と最後の頁 69-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高榮蘭	４．巻 1
２．論文標題 「文学の境界を翻訳する」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『早稲田大学国際文学館ジャーナル』	６．最初と最後の頁 45－49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高榮蘭，金景彩	４．巻 13
２．論文標題 【翻訳：共訳】「李載然「生活と態度 機械が読む『開闢』と『朝鮮文壇』の作品批評用語と批評家」」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』	６．最初と最後の頁 199－218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高榮蘭	4．巻 4
2．論文標題 「幽霊たちの路上文学への招待 金時鐘・路上生活者・HARUKOたち」（韓国語）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『文学・思想』（韓国語）	6．最初と最後の頁 62-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林和歌子，十代健，北原鉄朗，閑田朋子，石岡丈昇，高榮蘭	4．巻 102
2．論文標題 「外国語で行う授業に関する授業法開発―学際的アプローチを通して」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』	6．最初と最後の頁 129-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11501/1730700	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高榮蘭	4．巻 105
2．論文標題 文学の路上を生きる ： 在留資格から考える「日本語文学」という落とし穴（小特集 ナショナリズムの現在）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本近代文学	6．最初と最後の頁 95-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高榮蘭	4．巻 54
2．論文標題 書評「黒川伊織『戦争・革命の東アジアと日本のコミュニスト 1920―1970』」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 社会文学	6．最初と最後の頁 198-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　12件／うち国際学会　12件）

１．発表者名 Setsu Shigematsu, Maja Vodopivec, Chizuko Naito, Youngran Ko, Rin Odawara
２．発表標題 International Roundtable "Anti-Imperialism and Women in Japan"
３．学会等名 東京外国語大学、International Roundtable "Anti-Imperialism and Women in Japan"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 酒井直樹，平野克弥，高榮蘭
２．発表標題 TPW Keynote Dialogue " The State of Japan Studies and Empire: Co-figurations of Race, Coloniality and Knowledge Production"
３．学会等名 Transpacific Workshop: Co-Prouctions Literature, Film & Diaspora（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Brett de Bary, Watanabe Naoki, Christina Yi, Ko Youngran, Andrew Harding
２．発表標題 2022 ASCJ "Session 2: Between the Transnational and the International: Shifting Borders of Zainichi Literary Subjectivity in Postwar Japan"
３．学会等名 2022 Asian Studies Conference Japan (ASCJ)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 高榮蘭
２．発表標題 「朝鮮人の「転向」をめぐる本土と沖縄の分裂――1960年前後の転向言説と金達寿「朴達の裁判」」
３．学会等名 国際シンポジウム及び「東アジアの植民主義と文学研究会」2022年大会：「台湾／満洲／朝鮮の植民主義と文化交渉」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 高榮蘭
２．発表標題 「K文学とクールジャパンのあいだから―日本語で「82年生まれ、キム・ジヨン」と「こびとが打ち上げた小さなボール」を重ね読みする」（韓国語）
３．学会等名 2022年世界韓国語ハンマダン「冷戦と分断を超える韓国語の書物の文化史」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 高榮蘭
２．発表標題 「文学の路上に集まろう！―「母語」幻想と新しい文学の書き手たち」
３．学会等名 第７回福大韓国学シリーズ（講演会）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 高榮蘭
２．発表標題 「冷戦と転向―1960年代における在日と反米の表象のはざまで」（韓国語）
３．学会等名 世界文学大学講座（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Youngran Ko
２．発表標題 " The Structure of the“Japanese-Style” Cold War and the Discourse of “Asia”: Between Vietnam War Reporting and the Anti-Vietnam War Movement"
３．学会等名 International Workshop: Wars and Revolution in (E)motion:Inter-regional Cultural Exchanges in Cole War Asia,Hong Kong University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Youngran Ko
２．発表標題 "Between the Transnational and the International : Shifting Borders of Political Subjectivity in Postwar Literature in Japan "
３．学会等名 AAS 2023 Annual Coference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 高榮蘭
２．発表標題 文学の路上を生きる：新自由主義時代の文学と女の身体の記憶を読む
３．学会等名 東京外国語大学国際日本研究センター比較日本文化部門主催 東アジア連続講演会第11回 境界と路上を考える（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高榮蘭
２．発表標題 レイプの位相と男性セクシュアリティー大島渚『絞死刑』と大城立裕『カクテルパーティー』のあいだから
３．学会等名 国際日本文化研究センター共同研究会「戦後の傷跡」主催　第6回共同研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 高榮蘭
２．発表標題 出版帝国の『満・鮮』をめぐる戦争（韓国語）
３．学会等名 台湾清華大学台湾文学研究所・東アジア植民地文学研究会共催「2021 東亜植民地主義と文学会議」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高榮蘭
２．発表標題 地域語文学の公共性とトランスナショナル人文学（韓国語）
３．学会等名 全南大学校BK21FOUR教育団「第４回 海外韓国学クラス」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 坪井秀人，William Marotti，呉叡人，高榮蘭，佐藤泉，森岡卓司
２．発表標題 戦後日本の傷跡 ラウンドテーブル
３．学会等名 国際日本文化センター第55回国際研究集会「戦後日本の傷跡」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 成田龍一，Brett de Bary，平野克弥，鳥羽耕史，高榮蘭，葛西弘隆
２．発表標題 国際シンポジウム「批判的日本研究の展望」ラウンドテーブル
３．学会等名 国際シンポジウム「批判的日本研究の展望」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計8件

１．著者名 孫知延，高榮蘭，内藤千珠子，飯田佑子，金美晶，崔末順	４．発行年 2022年
２．出版社 ソミョン出版	５．総ページ数 337
３．書名 『戦後の東アジアにおける女性の語りは如何に出会えるのか』（韓国語）	

1．著者名 孫知延，高榮蘭，友常勉，佐藤泉，大城貞俊，成田千尋	4．発行年 2022年
2．出版社 ソミョン出版	5．総ページ数 353
3．書名 『冷戦アジアと沖縄という問い』（韓国語）	

1．著者名 石川巧，飯田祐子，小平麻衣子，金子明雄，日比嘉高，高榮蘭	4．発行年 2023年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 352
3．書名 文学研究の扉をひらく	

1．著者名 Tatsuya Kageki，Jiajia Yang，Youngran Ko	4．発行年 2023年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 236
3．書名 Women in Asia under the Japanese Empire	

1．著者名 宇野田尚哉，坪井秀人，キアラ・コマストリ，川口隆行，木下千花，森岡卓司，鳥羽耕史，小杉亮子，ニコラス・ランブレクト，佐藤 泉，成田龍一，徐潤雅，高 榮蘭，村上克尚，石川巧，大塚英志	4．発行年 2021年
2．出版社 大阪大学出版会	5．総ページ数 370
3．書名 対抗文化史	

1．著者名 金在湧，高榮蘭，李相瓊，李載然，五味渕典嗣，張紋碩，千春花，崔末順，柳書琴，柳春英，劉曉麗	4．発行年 2021年
2．出版社 ソミョン出版	5．総ページ数 429
3．書名 東アジア植民地文学比較研究 日中戦争以降を中心に（韓国語）	

1．著者名 坪井 秀人，高榮蘭，市川遥，葉暁瑶，ニコラス・ランブレクト，中村平，宋恵媛，解放，川口隆行，キツニック・ラウリ，鳥羽耕史，髙畑早希，田村美由紀，黒川伊織，石川巧，増田斎，小杉亮子，辛島理人，奥村華子，佐藤泉，光石亜由美，ホワニシャン・アストギク，飯田祐子，美馬達哉	4．発行年 2022年
2．出版社 臨川書店	5．総ページ数 376
3．書名 戦後日本の傷跡	

1．著者名 蘭 信三，松田利彦，李 洪章，原 佑介，坂部 晶子，八尾 祥平，高榮蘭	4．発行年 2022年
2．出版社 みずき書林	5．総ページ数 728
3．書名 帝国のはざまを生きる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計4件

国際研究集会 講演会「デジタル時代の韓国文学-WEB小説の現在」（講演者：孫真元）	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 国際ワークショップ「人文学の境界を問う」	開催年 2023年～2023年

国際研究集会 ワークショップ「なぜ！PCゲームはこの時代の新しい文学なのか」講演者：OH Young Jin	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 国際会議「『書物の近代』からそれぞれの「書物」の近代へ」（登壇者：紅野謙介・Edward Mack・五味渕典嗣・黄鎬徳・中野綾子・呉佩珍）	開催年 2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
韓国	圓光大学	慶熙大学	成均館大学	他2機関
中国	香港大学			
その他の国・地域	国立政治大学	淡江大学		
米国	ワシントン大学	シカゴ大学	カリフォルニア州立大学サクラメント校	